『クリスマス・キャロル』論

—— 生と死 ——*

井　原　慶一郎

イントロダクション（ディケンズとドストエフスキー）

ディケンズ（1812～70年）はドストエフスキーのことを知らなかったが，ドストエフスキー（1821～81年）はディケンズの熱心な読者だった。ドストエフスキーはディケンズの主要な作品のほとんどをロシア語訳やフランス語訳で読んでいた。彼は，ディケンズについて，小説，エッセイ，書簡，ノートなどのなかでたびたび言及している。ディケンズがドストエフスキーに文学的な影響を与えたことは間違いない[1]。

ローラリー・マクパイクは，『ドストエフスキーのディケンズ——文学的影響に関する研究』において，ディケンズがドストエフスキーに与えた影響から逆にディケンズを読み直す視点を提供している[2]。私がこの論文でやろうとしているのもそれに似た試みである。すなわち，『カラマーゾフの兄弟』（1879～80年）から『クリスマス・キャロル』（1843年）を読み直す。ただし，私が述べるのは，両者の影響関係についてではなく，両者の類似性についてである。

『クリスマス・キャロル』には，『カラマーゾフの兄弟』で扱われているい

---

* 筆者は，「鹿児島英語英文学会　第８回大会」（2001年11月24日）において，この論文の要旨を発表した。

[1] ディケンズがドストエフスキーに与えた文学的影響については，Angus Wilson, "Dickens and Dostoevsky" (1970), *Diversity and Depth in Fiction* (ed. Kerry McSweeney), The Viking Press, 1983, pp. 64-87, 及び N. M. Lary, *Dostoevsky and Dickens: A Study of Literary Influence,* Routledge and Kegan Paul, 1973を参照されたい。

[2] Loralee MacPike, *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence,* Barns & Noble Books, 1981.

くつかのテーマが凝縮されたかたちで示されており，前者は後者のミニチュアとして読むことができる（ただし，後者がシリアスであるのに対して，前者はポップである）。なぜそうなのか。一方は，クリスマス（キリスト）の精神を描こうとしており，もう一方は，現代のキリストを描こうとしているからである。だが，それをいうには同じ宗教観が前提とされなければならない。

一言でいえば，彼らは同じ「イエス主義者」であった。つまり，彼らが信じていたのはイエスその人の言行であって，キリスト教の教義一般ではない。たとえば，ドストエフスキーは，晩年のノートのなかでイエスについてつぎのようにいっている。

> 道徳性というものを，自分の信念への忠実さと定義するのでは足りない。それ以上に絶えずこういう問いを自分でかき立てなければならない。つまり「自分の信念は確かなものであろうか」という問いを。信念の判断基準は常に一つ，すなわちキリストである。だがこれはもはや哲学ではなく，信仰であり，そして信仰とは赤い花だ。……「キリストも過ちを犯した。それは証明されている！」と言うかもしれない。しかし私の燃える感情はこう告げる。「いや私はあなた方とともにいるよりも，むしろ過ちとともに，キリストのもとに残りたい。」[3]

ドストエフスキーは，『作家の日記』（1876年6月）のなかで，ディケンズのことを「偉大なキリスト教徒」と呼んでいる。また，ディケンズは自分の子供たちのためだけに『キリスト伝』を書いている[4]。ディケンズとドストエフスキーは，イエスを通じてつながっているのである。

両者のリアリズム観の類似はおそらくここからきている。つまり，現実のなかに見出される人間の理想的な行い――それらを一身に体現した人物をリアルだと思うかどうか。言い換えれば，人間の真の理想としてのイエスをリアルだ

---

[3] バフチン『ドストエフスキーの詩学』から引用した（200ページ）。
[4] *The Life of Our Lord* は，1846年に書かれ，ディケンズの死後，1934年に出版された。

と思うかどうか。ディケンズとドストエフスキーにとって，現実に実在しうる理想は，現実に実在する人物とまったく同じように現実的である[5]。そのことが彼らの文学の本質を決定しているといってよい。

『クリスマス・キャロル』の構成は，第一節「マーレーの幽霊」，第二節「第一のクリスマスの精霊」，第三節「第二のクリスマスの精霊」，第四節「最後のクリスマスの精霊」，第五節「これでおしまい」である。第一節で，マーレーの幽霊によって，これから三人の精霊が順番にスクルージを訪れるということが予告されるが，その三人の精霊とは，過去・現在・未来のクリスマスの精霊にほかならない。『クリスマス・キャロル』は，一言でいえば，守銭奴のスクルージが，過去・現在・未来のクリスマスの精霊に出会って改心し，一晩（12月24日⇒25日）で慈善家になるという話である。この論文では，『クリスマス・キャロル』の構成にしたがって，第一章で「過去」，第二章で「現在」，第三章で「未来」を取り上げ，この作品の最重要テーマである「生と死」の問題について考えてみたい。

I　過去――「幼な子の如くあれ」

第一のクリスマスの精霊は，「過去」のクリスマスの精霊である。「過去」とは，自分の子供時代にほかならない。

スクルージは，「過去」のクリスマスの精霊とともに，自分の子供時代をふりかえる。そして，作品の最後では，生まれかわって子供のようになる。《「今日はいったい何月何日なんだろう。精霊たちと何日くらい付き合っていたんだろう。全然わからない。生まれたばかりの赤ん坊と同じで，何にもわからない。でも，かまわんさ，気にしない，気にしない。赤ん坊になりたいくらいだ！」》

---

[5] 《ディケンズは単に現実の理想を取り上げただけであっても，その人物は現実に実在する人物とまったく同じように，現実的なのである》（ドストエフスキー「展覧会に関連して」『作家の日記』1，小沼文彦訳，ちくま学芸文庫，1997年，227ページ）。

(『クリスマス・キャロル』，151ページ)。したがって，スクルージにとって重要だったのは，子供の心を取り戻すことである。

「子供」という言葉は，人を形容する際，否定的にも肯定的にも使われる。ネガティブな意味で「子供っぽい」(childish) といったり，ポジティブな意味で「子供のような」(childlike) といったりする。この意味で，「子供」は両義的である。とりあえず，前者を，啓蒙されていない状態を表す形容詞，後者を，子供が本来持っている善い性質を保持している状態を表す形容詞であると理解しておく[6]。

子供の本性については，さまざまな議論がなされているが，大きく分ければ，性善説，性悪説，中立説のいずれかである。性善説によれば，子供は善い性質(それが発現する可能性) を生まれつき持っているのだから，それらを損なわないようにしなければならない。性悪説によれば，子供は生まれつき性悪(しょうわる)だから，厳格な教育を施さなければならない。また，中立説によれば，生まれたばかりの子供の心は「白紙状態 tabula rasa」(ロック) であり，環境や教育によって善くも悪くもなる。

キリスト教では，原罪思想 (人間は生まれながらにして罪を背負っている) から，一般に，性悪説の立場をとっているが，『福音書』を読むかぎり，イエスは性善説の立場をとっている。たとえば，「幼な子の如くあれ」というイエスの有名な言葉がある。「マタイ福音書」第十八章から引用する。

> その時，弟子たちがイエスの所に来て，「ではいったいわれわれのうちのだれが天の国で一番えらいのですか」とたずねた。イエスは一人の子供を呼びよせ，彼らの真中に立たせて言われた，「アーメン，わたしは言う，あなた達は生まれかわって子供のように小さくならなければ，決して天の国に入ることはできない。だから，この子供のように自分を低くする者，

[6] カントによれば，啓蒙とは，「人間が自分自身に責めのある未成年状態から脱出すること」であり，具体的には，「自分で思考すること」，「他人の立場になって思考すること」である (磯江景孜「『啓蒙とは何かという問いに対する回答』」『カント辞典』，弘文堂，1997年，143ページ)。

それが天の国では一番えらい人である。」(『福音書』，125ページ)

ここでは，「自分たちのうちで誰が一番えらいか」について弟子たちがイエスに尋ねたということになっているが，「マルコ福音書」第九章では，イエスが弟子たちを叱ったということになっている[7]。

カペナウムに来た。家につかれるとイエスは，弟子たちにお尋ねになった，「道々何を評議していたのか。」彼らは黙っていた。自分たちのうちでだれが一番えらいかと，道々論じ合っていたからである。イエスは坐って，十二人を呼んで言われる，「一番上になりたい者は皆の一番下になれ，皆の召使になれ。」それから，一人の子供の手を取って彼らの真中に立たせ，それを抱いて言われた，「わたしの名を信ずる一人のこんな子供を迎える者は，わたしを迎えてくれるのである。わたしを迎える者は，わたしを迎えるのでなく，わたしを遣わされた方をお迎えするのである。」(『福音書』，38ページ)

弟子たちはこのイエスの言葉がよく理解できなかったようである。なぜなら，後日，イエスからまったく同じ言葉で叱られているからである。

イエスにさわっていただこうとして，人々が子供たちをつれて来ると，弟子たちが咎めた。イエスはこれを見て憤り，弟子たちに言われた，「子供たちをわたしの所に来させよ，邪魔をするな。神の国はこんな小さな人たちのものである。アーメン，わたしは言う，子供のようにすなおに神の国の福音を受け入れる者でなければ，決してそこに入ることはできない。」

---

[7] 滝澤武人はつぎのように書いている。《マルコはきわめて個性的な福音書であり，原始キリスト教団の主流派を痛烈に批判しながら，イエスのように生きるべきことを懸命に呼びかけている。……反主流派的なマルコの主張に修正を加えながら，それぞれの信ずる正統的・教会的な立場からイエスをとらえなおすこと，それがマタイとルカの使命であった》(『人間イエス』，講談社現代新書，1997年，31-2ページ)。

それから子供たちを抱き，頭に手をのせて祝福された。(「マルコ福音書」第十章『福音書』，40ページ)

実は，うえで引用した「マタイ福音書」第十八章のなかの一節が『クリスマス・キャロル』のなかで引用されている。《「そしてイエスさまは子供を抱いて，人びとの間に……」》(138ページ)。これは，未来のクリスマスの情景のなかで，登場人物のピーター君が，炉辺で聖書を朗読する場面である。母親が涙ぐんだので途中で読むのをやめてしまうが，それは亡くなった息子のティム坊や（ピーター君の弟）のことを思い出したためである。

このティム坊やが，イエスが弟子たちの真中に立たせた，あの『福音書』のなかの子供の具体化されたイメージであることは間違いない。ティム坊やは，実際に，小さく，病弱であるだけではなく，自分を低くし，すなおにキリスト（救世主）の名を信じている。たとえば，父親のボブ・クラチットは，現在のクリスマスの情景のなかで，ティム坊やと教会から帰ってきた後，息子についてつぎのようにいう。

「……長いこと一人で座っていると，どういうわけか考え込んじゃったんだね。妙なことをいろいろ考えたらしい。帰り道にこんなこと言うのさ。足の悪いぼくをみんながクリスマスの日に教会で見るのはいいことだね，聖書に出てくるイエスさまの奇跡で，足の悪い乞食が歩けたり，盲人の目が見えるようになる話を思い出すことができるからね，だってさ」(『クリスマス・キャロル』，94-5ページ)

こんな子供はいるはずがない・子供を美化しすぎているという批判もあるかもしれない。しかし，描かれているのは，肉体を持った観念であると考えればよい（観念的であるからといって，リアルではないということにはならない)。重要なのは，経験的なリアリズムにこだわることなく，その登場人物のエッセンス（本質）をつかむことである。ティム坊やは，『福音書』のなかの子供と

いう観念の受肉なのである[8]。

そこで，イエスの言葉に戻れば，子供とは，第一に，小さい者であり，第二に，すなおに神の国の福音を受け入れる者である。したがって，「子供のようになる」とは，まず，小さな子供のように自分を低くすることであり，次に，すなおに神の国の福音を受け入れることである。

第一の点についていえば，イエスは，他のメンバーに対して上位（メタ）レベルに立つことを禁止しているだけではなく（なぜなら上位レベルに立つことができるのは神だけだから），そもそも自分と他人を比較してどちらがえらいとか，どちらがより天国にふさわしいとか，お前らが決めるなといっているように思われる。それは（唯一上位レベルに立つことができる）神のみが決定しうることだからである。

ただし，子供は実際に小さい者であり，ことさら自分を低くしているわけではないから，子供が本来持っている善い性質について考えるとき，重要なのは，第二の点である。では，「すなおに神の国の福音を受け入れる」とはどういうことか。

たいていの子供は，自分たちにふさわしいとされている神の国（天国）について何も知らないし，考えたことすらない。したがって，すなおに神の国の福音を受け入れるとは，むしろ神の国（あの世）について何も考えないということである。要するに，子供は，死ぬことに関して無心なのである。逆にいえば，生きることを純真に信じている。

この意味で，子供が本来持っている善い性質とは，絶望しない（生をあきらめない）ということである[9]。われわれは，自分はなぜ生きているのかと問う

---

[8] 私は以前つぎのように書いた。「ディケンズは，観念（イデア）を《物質的・肉体的次元へと移行させること》〔バフチン〕によって主要な登場人物を創造した。つまり，ディケンズの作品の登場人物は，イデアの人，いいかえれば，格下げされ，“現実”（下位レベル）に存在するイデアである」（「大江健三郎とディケンズ—『キルプの軍団』を中心に—」鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第51号，2000年，182ページ）。

[9] 『クリスマス・キャロル』には，絶望しかけている二人の子供（「無知」と「貧困」）が登場する（117-20ページ）。子供を絶望させるとすれば，それは大人の責任である。

前に，すでに生きている。それまでのあいだは，子供である。いいかえれば，すなおに神の国の福音を受け入れる者である。したがって，「幼な子の如くあれ」とは，かつてそうであったように，「死に関して無心であれ，ただ生のみを考えよ」ということにほかならない。

ところで，浅田彰は，『逃走論』のなかで，「パラノ型」と「スキゾ型」という二つの人間のタイプについて述べている。

> パラノってのは偏執型（パラノイア）のことで，過去のすべてを積分＝統合化（インテグレート）して背負ってるようなのをいう。たとえば，十億円もってる吝嗇家が，あと十万，あと五万，と血眼になってるみたいな，ね。それに対し，スキゾってのは分裂型（スキゾフレニー）で，そのつど時点ゼロで微分＝差異化（デイファレンシエート）してるようなのを言う。つねに「今」の状況を鋭敏に探りながら一瞬一瞬にすべてを賭けるギャンブラーなんかが，その典型だ。
>
> さて，もっとも基本的なパラノ型の行動といえば，「住む」ってことだろう。一家をかまえ，そこをセンターとしてテリトリーの拡大を図ると同時に，家財をうずたかく蓄積する。妻を性的に独占し，生ませた子どもの尻をたたいて，一家の発展をめざす。このゲームは途中でおりたら負けだ。「やめられない，とまらない」でもって，どうしてもパラノ型になっちゃうワケね。……ところが，事態が急変したりすると，パラノ型ってのは弱いんだなァ。ヘタをすると，砦にたてこもって奮戦したあげく玉砕，なんてことにもなりかねない。ここで「住むヒト」にかわって登場するのが「逃げるヒト」なのだ。コイツは何かあったら逃げる。ふみとどまったりせず，とにかく逃げる。そのためには身軽じゃないといけない。家というセンターをもたず，たえずボーダーに身をおく。家財をためこんだり，家

イエスはこういっている。《「この世は罪のいざないがあるから禍だ，罪のいざないの来るのを避けることができないからである。しかしいざないを来させる人は禍だ」》。《「わたしを信ずるこの小さな者を一人でも罪にいざなう者は，大きな挽臼を首にかけられて深い海に沈められる方が得である」》（「マタイ福音書」第十八章『福音書』，125ページ）。

長として妻子に君臨したりはしていられないから，そのつどありあわせのもので用を足し，子種も適当にバラまいておいてあとは運まかせ。たよりになるのは，事態の変化をとらえるセンス，偶然に対する勘，それだけだ。とくると，これはまさしくスキゾ型，というワケね。(10-1ページ)

守銭奴のスクルージは，妻子は持たないが，極端なパラノ人間である。だが，スクルージも最初からそうだったわけではない。スクルージは，過去のクリスマスの情景のなかで，彼を見放すことになるフィアンセから，《「あなたは世間を恐れすぎているのよ。世間の下賤な口から逃れたいという望みが，他の望みすべてを呑み込んでしまったのよ。これまで私はあなたを見てきたけど，立派な望みが一つずつ潰れて，とうとう金儲けの欲だけにこり固まってしまったのよ。そうでなくて？」》と問われて，《「あの頃のぼくは，まだ子供だったのさ」》と答えている（『クリスマス・キャロル』，68-70ページ)。浅田によれば，子供は最初はみんなスキゾ型（スキゾ・キッズ）だが，近代資本主義はあくなき蓄積をめざすパラノ・ドライブによって動いているので，子供たちは強引にそこへひきずりこまれ，家族・学校・社会という回路を通じて，パラノ化されていくのである（『逃走論』，23ページ)。

したがって，『クリスマス・キャロル』は，つぎのような物語として読むことができる。すなわち，《「やめられない，とまらない」でもって》極端にパラノ化したスクルージが，最後に《何もかも放り出して》再びスキゾ・キッズへと戻る物語として。スクルージは，いわば，「宝を地上に積むこと」(「マタイ福音書」第六章『福音書』，84ページ)，そしてその動機となる「あしたのことを心配すること」(同上，86ページ）から逃走したのである。パラノ人間からスキゾ・キッズへと転換するその決定的な契機となるのは，それらをすべて無（ゼロ）にするような事態の急変に直面することだが，これについてはⅡで述べる。

生まれかわって子供のようになり，身軽になったスクルージは，喜びを全身で表現する。現在生きていることそれ自体が喜びだからである。《「ああ，何が

何だかわからなくなっちまったぁ！」スクルージは泣き笑い，靴下でわれとわが身をぐるぐる巻きに縛りつけました。「鳥の羽根みたいにウキウキ，天使みたいにワクワク，小学生みたいにワイワイ，酔っぱらいみたいにクラクラ！ みなさーん，クリスマスおめでとう！　世界中のみなさーん，新年おめでとう！」》（『クリスマス・キャロル』，150ページ）。

『クリスマス・キャロル』では，クリスマスの遊びの描写に多くの紙数が費やされているが，そこでは，大人も子供と一緒に・子供のようになって遊んでいる。語り手は，クリスマスの遊びについてつぎのようにいう。《時どきは子供に戻るのもいいものです。特に幼な子の誕生を祝うクリスマスにはね》（『クリスマス・キャロル』，112ページ）。遊んでいるとき，大人は子供に戻っている。遊びは，純真に生を信じているからこそおこなわれる行為だからである。

Ⅱ　現在――〈今〉を生きる

第二のクリスマスの精霊は，「現在」のクリスマスの精霊である。「現在」とは，今現在自分が生きているということにほかならない。

『クリスマス・キャロル』に書かれているいくつかの点を明確にするために，まず，『カラマーゾフの兄弟』のなかのゾシマ長老の兄のエピソード（「ゾシマ長老の年若き兄」）を取り上げたい。十八歳の青年マルケールは，《「…神なんてものは決してありやしない」》と明言するような無神論者だったが，突然病気になり，死期が近づくにつれて，この世の福音について語り始める。

> 「お母さん，泣くのはおよしなさいね，」と彼はよくこんなことをいった。「僕はまだまだ長く生きていられます。まだまだ長くみんなと楽しむことができます。ねえ，人生というものは，ほんとうに人生というものは楽しい愉快なものじゃありませんか？」
>
> 「まあ，お前なにをいうの，毎晩毎晩熱と咳で苦しめられて，胸が裂けはしないかと思われるくらいだのに，なんの楽しいことなんかあるもので

すか。」

「お母さん,」と兄は答えた。「泣くのはおやめなさい。人生は楽園です。僕たちはみんな楽園にいるのです。ただ僕たちがそれを知ろうとしないだけなんです。もしそれを知る気にさえなったら，明日にでもこの地上に楽園が現出するのです。」(『カラマーゾフの兄弟』第二巻，155ページ)

楽園は天上にではなく，この地上にこそある，とマルケールはいう。われわれはそれに気づいていないだけである。《「ああ，私の周囲には，こうした神の栄光が充ち満ちていたのだ。小鳥，木立，草場，青空――それだのに，私一人だけは汚辱の中に住んで，すべての物を汚していた。そして美も栄光もまるで気がつかないでいたのだ」》(同上，158ページ)。

マルケールは，あの世については最後まで口をつぐんだままである。今日一日を生きることだけを考えている。

よく医者が見に来ると…，「ねえ，先生，まだ一日くらいこの世に生きていられるでしょうか？」と冗談をいうことがあった。

「一日どころか，まだ幾日も幾日も生きていられます。」と医者は答える。「まだまだ幾月も幾年も生きていられますよ。」

「一たい年がなんです，月がなんです？」と兄は叫ぶ。「何も日にちなぞ数えることはないじゃありませんか。人間が幸福を知り尽くすためには，一日だけでもたくさんですよ。ねえ，皆さん，僕たちは喧嘩をしたり，お互いに自慢しあったり，人から受けた侮辱をいつまでも憶えていたりしていますが，それよりかいっそ庭に出て散歩したりふざけたりして，お互い愛しあい讃めあって，接吻したらいいじゃありませんか。自分らの生活を祝福したらいいじゃありませんか。」(同上，157-8ページ)

ゾシマ長老は，最後に，つぎの場面を記憶に残る重要な思い出の一つとして語っている。

ある時，余はただひとり兄の部屋へ入って行った。ちょうど兄のほかには誰ひとりいなかった。それは晴ればれした夕方のことで，日はまさに没せんとして，部屋ぜんたいを斜かいに横切って光線を投げている。兄は余を見つけると，手を上げて差し招くので，余はその傍へ近寄った。すると兄は両手を余の肩に掛け，さも感激したような懐かしげな眼ざしでじっと余を見つめるのであった。何もものをいわないで，一分間ばかりこうしてじっと見つめていたが，

「さ，もうあっちイ行ってお遊び，僕のかわりに生きておくれ！」といった。(同上，158ページ)

このゾシマ長老の兄のエピソードのなかには，『クリスマス・キャロル』を理解するうえで重要な点が三つある。一つは，「地上の楽園」ということであり，もう一つは，「今日（今）を生きる」ということであり，最後に，「自分の生を後世（こうせい）（後世（ごせ）ではない）にたくす」ということである。最後の点についてはⅢで述べるので，ここでは最初の二つの点を取り上げたい。

Ⅰで述べたように，スクルージが，「宝を地上に積むこと」・「あしたのことを心配すること」から逃走し，守銭奴から慈善家へと転換するその決定的な契機となるのは，それらをすべて無（ゼロ）にするような事態の急変に直面することである。その事態の急変とは，自分の死という事実にほかならない。スクルージは，未来のクリスマスの情景のなかで，自分の死の場面――死体，（弔われない）葬式，墓――を目のあたりにする。そして，将来自分は死すべき存在であるという事実を再認識する。

「メメント・モリ memento mori」という箴言がある。「死を忘れるな」という意味である。未来のクリスマスの精霊は，いわば，「メメント・モリ（死を忘れるな)」といっているのである（ジョン・リーチによる挿絵〔右図〕参照)。

スクルージは，自分の死の場面を見ることによって，将来自分は死すべき存在であるという事実を再認識するが，それらが幻影だったことがわかると，今度は逆に，現在自分は生きているという事実を再認識する。つまり，スクルー

The Last of the Spirits

ジは，死の側（いつか死ぬ）から生の側（今は生きている）に向かうのである。

死から生に向かうというのは，普遍的な法則であるように思われる（「死と再生」として定式化される）。なぜなら，生は，生でないもの（＝死）との対照においてのみ，その意味を明確にするからである。要するに，われわれは，生を実感するためには，死を意識せざるを得ないのである。

生は死の反対であり，死は生の反対であるから（生と死は矛盾概念），生と死は切り離して考えることができない。生について考えることは死について考えることであり，死について考えることは生について考えることである。この意味で，「メメント・モリ（死を忘れるな）」という箴言は，生に対してわれわれの注意をうながすものであり，またそういったものでしかない。したがって，「メメント・モリ（死を忘れるな）」とは，「明日死ぬかもしれないと思って，今日（今）を生きよ」ということにほかならない。

ところで，病気になってみて初めて健康のありがたさがわかる，ということがよくいわれるが，『クリスマス・キャロル』には，死んでみて初めて生のありがたさがわかった（！）死者の姿が描かれている。

ある年寄りの幽霊は特に親しい友人でした。この幽霊は白いチョッキを着て，ものすごく大きな鉄金庫を足首に縛りつけられて，下のほうの玄関口で赤ん坊を抱いて座っている可哀そうな女を助けてやることができないといって，さめざめ泣いているのでした。幽霊たちみんなが悲しんでいるのは，人間のために何かよいことをしてやりたいと思っているのに，いま

ではもうできなくなっている，ということなのでした。(『クリスマス・キャロル』，43-4ページ)

生きていれば，誰かのために何か（善いこと）ができる。これが，『クリスマス・キャロル』が教える生の意味である。『カラマーゾフの兄弟』にも同様のことが書かれている。ゾシマ長老は，説法のなかでこういっている。

諸師よ，「地獄とはなんぞや」と考察する時，余は次の如く解釈する，「即ち，もはや愛し能わざる苦悶である。」時間をもっても空間をもっても測ることの出来ない無限の世界において，ある一つの精神的存在物は，地上の出現によって「われ有り，故にわれ愛す」という能力を授けられた。彼は実行的な生きた愛の瞬間を，一度，たった一度だけ与えられた。これが即ち地上生活なのである。(『カラマーゾフの兄弟』第二巻，224-5ページ)

『クリスマス・キャロル』の幽霊にしても，ゾシマ長老の説法にしても，善いことをしなければ，地獄に落ちるといっているわけではない。自分が棺おけに入っているところを想像すれば，生きているうちになすべきことがはっきりするといっているのである。

死から再生したスクルージは，ゾシマ長老の兄のように，人生は楽園であるということを発見する。スクルージは今までそのことに気がつかなかっただけである。

スクルージは教会へ行って，町中を歩きまわって，忙しく往き来する人びとの姿を眺めて，子供たちの頭を撫でてやって，乞食に事情をきいてやって，家の地下の台所を眺めて，屋根を見上げて，どこもかしこも満足に思いました。町中を歩いて——いえ，どんなことをしても——自分の心がこんなに幸せになれるとは，これまで夢にも思っていなかったのです。(『ク

リスマス・キャロル』，156ページ)。

スクルージが誰かのために善いことをするのは，あの世のことを考えているからではない。(Ⅰで述べたように) 現在生きていることそれ自体が喜びであり，生きているということは，誰かのために何か (善いこと) ができるということだからである。

ところで，「明日死ぬかもしれないと思って，今日 (今) を生きる」という生き方は，逆説的だが，死それ自体については無関心である。つまり，どう生きるかだけを考えており，どう死ぬかということについてはまったく関心がない。この意味で，「〈今〉を生きる」とは，エンド (死，終わり，目的) を持たないということである。

エンドを持つ生き方というのは，生から死 (＝目的) に向かうような生き方，すなわち自分の生を死で締めくくるような生き方のことである。それは，自分の生を自ら意味づけ，完結させようとする生き方にほかならない。これに対して，エンドを持たない生き方というのは，たえず死から生に向かうような生き方，つまり自分の生を自ら意味づけ，完結させることを最後まで拒むような生き方のことである[10]。この意味で，後者の生き方において，生はエンドレスであるといってよい。

最後に，ユーモアについて述べておきたい。「メメント・モリ (死を忘れるな)」という箴言は，死を忘れ，したがって生を忘れている人にとっては意味があるが，実際に死を目の前にした人にとっては意味がない。そんなことはいわれなくてもわかっているからである。このとき，生きるために必要なのは，

---

[10] 柄谷行人はつぎのように書いている。《…漱石は『こゝろ』を書いたとしても，自殺したりするどころではなかった。彼は臨終において，「死んだら困るから」といったと伝えられている。それは漱石が死を恐れていたことを意味するのではない。彼は自分の生を劇化すること，自己完結的な意味づけを与えることを拒否した。彼は，森鴎外のように「石見人森林太郎」という遺書を残したりしなかった。たんにばったりと死んだのである。たんに死ぬことが，その人間の生を無意味にするわけではない》(「一九七〇年＝昭和四十五年」『終焉をめぐって』，講談社学術文庫，1995年，43ページ)。

死を明らかに見ることではなく，むしろ死を相対化することである。絶対的な死を笑い，死を相対化するのがユーモアである。いや，むしろ，死の絶対化を絶対に許さないのがユーモアであるといったほうがよい。

フロイトはユーモアについてつぎのように述べている。

> 誰かが他人に対してユーモア的な精神態度を見せるという場合を取り上げてみると，きわめて自然に次のような解釈が出てくる。すなわち，この人はその他人にたいしてある人が子供にたいするような態度を採っているのである。そしてこの人は，子供にとっては重大なものと見える利害や苦しみも，本当はつまらないものであることを知って微笑しているのである。（「ユーモア」『フロイト著作集』3，408ページ）

人はユーモア的な精神態度を自分自身に向けることがある。フロイトは，自我に対して上位（メタ）レベルにあるような自我を超自我と呼んでいるが，このとき，自我を子供のように取扱い，自我にたいして大人としての優越した役割を演じるのが超自我である。そして，この超自我は，自我にとっては重大なものと見える問題（たとえば自分の死）も，本当はつまらないものであることを知って微笑しているのである（超自我のその他の役割についてはⅢで述べる）。たとえば，ある人が，「明日の朝目が覚めなくてもかまわないが，目が覚めたら自分は死んでいたということだけは勘弁してもらいたいものだ」と考えて，死を相対化し，ある種の快感を得れば，それは，自我が超自我のユーモアによって慰められたのである。

フロイトは，この一見荒唐無稽なユーモアについてつぎのように説明している。

> …ユーモアからえられる快感は滑稽なものや機知からえられる快感ほどの強さに高まることは決してなく，腹からの笑いとなって爆発することも決してない。そしてまた，ユーモア的な精神態度をとる時の超自我が，現

実を拒否して錯覚に奉仕することも事実である。けれども，その原因はよく分からないながら，われわれはこのあまり強くない快感をきわめて価値高いものであるとし，この快感がとくにわれわれを解放し昂揚させるものであると感ずるのである。……大切なのは，それが自分自身に向けられたものであれ，また他人に向けられたものであれ，ユーモアが持っている意図なのである。いってみれば，ユーモアとは，ねえ，ちょっと見てごらん，これが世の中だ，随分危なっかしく見えるだろう，ところが，これを冗談で笑い飛ばすことは朝飯前の仕事なのだ，とでもいうものなのである。（同上，411ページ）

『クリスマス・キャロル』では，語り手自身が，一貫してユーモア的な精神態度をとっている。そして，そのことがこの作品全体のトーンを決定している。それは，一言でいえば，「カーニバル的な世界感覚」（バフチン）であり，そこでは，あらゆるものが（死さえ）相対化（格下げ）され，陽気なものとなっている[11]。いわば，語り手は，「ねえ，ちょっと見てごらん，これが世の中だ，随分危なっかしく見えるだろう，ところが，これを冗談で笑い飛ばすことは朝飯前の仕事なのだ」といっているのである。

Ⅲ　未来――死後の生（永遠）

第三のクリスマスの精霊は，「未来」のクリスマスの精霊である。「未来」とは，自分の死後の世界にほかならない。ただし，ここでいう死後の世界とは，あの世のことではない。自分が死んだ後のこの世界のことである。

自分が死ねばすべてが終わるという考えは，自己完結的であり，他者との関係を含まないから，ナルシシズム（自己愛）である。そこには倫理が欠けている。倫理とは，理性によるものであり，理性は時間と空間を超越したものだか

[11] バフチン『ドストエフスキーの詩学』第四章「ドストエフスキーの作品のジャンルおよびプロット構成の諸特徴」参照。

らである。われわれには，自己の有限性を超えて，普遍的に考える能力，すなわち理性が備わっている。

スクルージは，未来のクリスマスの情景のなかで，自分が死んでもそれで終わりではないということを知る。スクルージは，誰からも弔われない死体（実は自分の死体）を見つめているとき，心のなかでつぎのような声を聞く。

> 冷たい，恐ろしい，無常な死神さんよ。ここはあなたの領分ですから，いくらでも恐ろしい造作を並べてください。でも，愛され，敬われ，惜しまれて死んだ人に対しては，いくらあなただって，手も足も出ないのですよ。安らかな寝顔をゆがめることも，毛一本乱すこともできないのですよ。いまは手もだらりと重く，放せば落ちてしまいます。いまは心臓の動悸も脈もありません。でも，生前に手がやさしく，温かく，誠実で，心臓が大らかで思いやりと慈愛にみちていて，人間らしい血が脈打っていた人であれば，死神さんよ，いくらあなたが荒れ狂っても，その善行の種が芽をふいて，この世に永遠に生き続けるのですよ！（『クリスマス・キャロル』，134-5ページ）

『クリスマス・キャロル』のなかで，「愛され，敬われ，惜しまれて死んだ人」の例として描かれているのは，（Ｉで述べた）ティム坊やである。父親のボブ・クラチットは，ティム坊やの死後，子供たちを前にしてつぎのようにいう。

> 「いいかい，ぼくたちがいつか離ればなれになることがあっても，可哀相なティム坊やのことは，絶対忘れないようにしようね――わが家で最初に離れて行った子だもの」
>
> 「忘れませんとも！」皆がいっせいに叫びました。
>
> 「小さな子供だったけど，やさしい我慢強い子供だった。だから，それを思ったら，わが家ではつまらんことで喧嘩なんかよそうね。喧嘩をした

くなったら，ティム坊やのことを思い出そうね」

「忘れませんとも！」

「これでぼくも安心だ。幸せな気持ちになれるよ」

そういう父さんに，母さんも娘たちもチビ君たちもキスをしました。ピーターと父さんは握手を交わしました。ティム坊やの霊が神様のように一家を守ってくれるのです。(『クリスマス・キャロル』，142-3ページ)

いわば，ティム坊やが播いた（子供らしい）善行の種は芽をふいて，この世に生き続けているのである。『カラマーゾフの兄弟』にも同様の場面がある。アリョーシャは，少年イリューシャを埋葬した後，子供たちを前にした最後の説法のなかでつぎのようにいう。

「私たちは今後一生涯，たとえどんなことが起こっても，また，二十年も会わなくっても，あの憐れな少年をここで葬ったことを，忘れないようにしましょう。……私たちはたとえ重大な仕事で忙しい時にも，――名誉を勝ち得た時にも，あるいはまた大いなる不幸に陥った時にも，とにかくいかなる時においても，かつてこの町でお互いに善良な感情に結び合されながら，あの憐れな少年を愛することによって，私たちが実際以上立派な人間になったことを，決して忘れないようにしましょう…。……こうしてイリューシャを葬ったことや，臨終の前に彼を愛したことや，今この石の傍でお互いに親しく語り合ったことを思い出したら，もし仮に私たちが残酷で皮肉な人間になったとしても，今この瞬間に私たちが善良であったということを，内心嘲笑するような勇気はないでしょう！　それどころか，この一つの追憶が私たちを大いなる悪から護ってくれるでしょう。」(『カラマーゾフの兄弟』第四巻，402-3ページ)

ここで思い出されるのは，ゾシマ長老の兄が，自分の生を弟のゾシマ長老にたくしたことである。《「さ，もうあっちイ行ってお遊び，僕のかわりに生きて

おくれ！」》。ゾシマ長老の兄の生き方（その死も含めたすべて）がゾシマ長老に影響を与え，さらに，ゾシマ長老を通じてアリョーシャに影響を与えている。つまり，ゾシマ長老の兄―ゾシマ長老―アリョーシャ―子供たちという系譜ができているのである[12]。このように，ある人の生は，後世に与えた影響によって，その人の死後も，この世に生き続けるといってよいが，それが善い影響となるように心がけるのが倫理的な態度である。

カントによれば，それは，生まれながらにしてわれわれに課せられている義務である。すなわち，《その義務とは，――連綿として永続する子孫の系列…の心に影響を及ぼし，それによって彼等がますます善になり…，そしてまたこの義務も人類の一時代の成員から次の時代の成員に正しく受け継がれ得るように配慮する，ということである》（「理論と実践」『啓蒙とは何か』，179ページ）。

カントは，摂理（自然の意図）と人事が全体としてたどるところの過程，つまり歴史は，善から始まって悪に趣くのではなく，比較的に悪い状態からいっそう善い状態に向かって次第に発展するといっている。《そして各人が，おのがじし分に随って力の及ぶ限りこの進歩に寄与することこそ，すなわち自然そのものによって人間に課せられた任務なのである》（「人類の歴史の臆測的起源」『啓蒙とは何か』，80ページ）。もし，比較的に悪い状態からいっそう善い状態に向かって次第に発展するのでなければ，歴史は不毛である。それは，過去から何も学ばず，過去を礎としないということである。

しかし，実際に，われわれの生活は過去から継承されたさまざまな文化的遺産のうえに建設されており，われわれはそこから大きな恩恵を得ている。個人の自由と平等の権利を保障した法体系はその代表的なものである。カントはつぎのようにいっている。

…前の世代の人々は後の世代のために，骨の折れる仕事に営々と従事し

---

[12]『カラマーゾフの兄弟』のエピグラフは，つぎのイエスの言葉である。《誠に実に爾曹に告げん，一粒の麦もし地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし》（「ヨハネ福音書」第十二章二十四節）。

て後世の人々の利益を図り，彼等のために基段を用意する，そこで次の世代の人々はこの段の上に，自然の意図するところの建物を構築することができる…。…この建物に居住するという幸福を享けるのは，最も後世の人々だけであり，幾代もの先祖達は（もちろん自分で意図したわけではないにせよ），この建築物を工作したにも拘らず，自分達自身は彼等の下拵えした幸福に与り得ない…。確かにこのことは不可解な謎である，しかしひとたび次の事実を承認するならば，このような成行きは，同時に必然であることが明らかになる，すなわち――動物の一類としての人類が理性をもつと，個々の理性的存在者はことごとく死滅するが，しかし類としての人類は不死である，そこで人類の自然的素質は，完全な発展をとげることになる，という事実である。（「世界公民的見地における一般史の構想」『啓蒙とは何か』，29ページ）

人類の自然的素質が完全な発展をとげるというのは，必然的なプロセスとして人類の歴史がその理念に到達するということである[13]。それに向かって絶えず近接することが可能なその理念とは，全人類のなかに完全な公民的連合（自由で平等な個人による連合）を形成することである。いいかえれば，各人の自由が他人の自由と等しく共存する社会を国内的にも，国際的にも形成することである。それは「永遠平和」の実現にほかならない[14]。

---

[13] カントによれば，理念は理論的には仮象であり客観的実在性を持たないが，実践（倫理）的に要請され，それに向かって進むべき目標（理想）として統整的に機能する。

[14] 『カラマーゾフの兄弟』のなかで，イヴンはつぎのようにいう。《いいかい，すべての人間が苦しまなければならないのは，苦痛をもって永久の調和を贖うためだとしても，なんのために子供がそこへ引き合いに出されるのだ，お願いだから聞かしてくれないか？……どういうわけで子供までが材料の中に入って，どこの馬の骨だかわからない奴のために，未来の調和の肥やしにならなけりゃならないのだろう？》（第二巻，71ページ）。イヴンがいうように，「永遠平和」という「終わり」（目的）から見れば，子供の涙は目的のための手段となる。しかし，イヴンは目的と手段を取り違えている。贖われることのない涙を贖う唯一の方法は，後世が，それを礎として，二度とそのような悲劇が繰り返されないよう努力することだけである。いわば，そのような実践（倫理）こそが目的であり，「永遠平和」（理念）はそのための手段として要請されているのである。

なお，ここでいう自由とは，各人が自分自身に適切と思われる方法で自分の幸福を追求する自由である。ただし，その場合に，他人の同様の自由を毀損してはならない[15]。それは義務であるが，同時に自分自身の自由を守るためである。各人の自由を保障するために，各人の自由は制限されなければならない。さもなければ，各人の自由自体が失われてしまうからである。たとえば，フロイトはつぎのようにいっている。

> いまかりに，文化の側からのかずかずの禁令が全部解除されたと考えよう。するとわれわれは，気に入った女は手あたり次第に自分の性欲の対象にして構わないし，恋敵（こいがたき）をはじめ，何にまれ自分に邪魔な人間は躊躇なく打ち殺していいし，他人の物にしろ，所有者の許可を得ないで自分の物にすることができる。そうなったら，人生は満足の連続で，なんと素晴らしいことであろうか。もちろん，すぐさま最初の困難が現われる。すなわち，自分以外の人間もみな，自分とまったく同じ願望を持っていて，自分だけをとくに容赦してはくれないだろうからである。（「ある幻想の未来」『フロイト著作集』3，370ページ）

カントがいうように，一緒に生活する人間のあいだの平和状態は，なんら自然状態ではない。自然状態は，むしろ戦争状態（ホッブズ）である。それゆえ，平和状態は創設されなければならないのである（『永遠平和のために』，26ページ）。

文化の側からの禁令あるいは義務（各人の自由を制限するもの）には，外的なものと内的なものがある。前者は，法によるものであり，後者は，道徳によるものである。ここでは，フロイトの理論に基づきながら後者について考えてみたい。

---

[15] 他人の自由を毀損してまでも，自分の幸福を追求しようとする性癖——これがカントのいう「根源悪」（キリスト教でいう原罪）である（『単なる理性の限界内における宗教』）。この「転倒」の転倒（心術の革命）によって，人は善へと向かうことができる。スクルージの「回心」はこれである。

フロイトによれば，われわれは対立しあう二つの欲動（人間を行動に駆り立てる内在的な力）を持っている。一つは，生の欲動（エロス）であり，もう一つは，死の欲動（タナトス）である。死の欲動が外界に向かうと攻撃欲動になる。そして，この攻撃欲動をコントロールしているのが（Ⅱで述べた）超自我である。

フロイトは，このことについて公開書簡のなかでつぎのように説明している。

> 様々な思索を巡らした末に精神分析学者は一つの結論に達しました。破壊への衝動はどのような生物の中にも働いており，生命を崩壊させ，生命のない物質に引き戻そうとします。エロス的衝動が「生への衝動」をあらわすのなら，破壊への衝動は「死への衝動」と呼ぶことができます。「死への衝動」が外の対象に向けられると，「破壊への衝動」になるのです。……しかし，破壊への衝動の一部は生命体へ内面化されます。精神分析学者たちはこの破壊衝動の内面化から，たくさんの正常な現象と病理学的な現象を説明しようとしました。それだけではありません。冒涜的なことに聞こえるかもしれませんが，精神分析学者の目から見れば，人間の良心すら攻撃性の内面化ということから生まれているはずなのです。（「アインシュタインへの手紙」『ヒトはなぜ戦争するのか？』，47ページ）

超自我は，自分の攻撃欲動の一部が内面化されることによって形成されたものである。つまり，他人を攻撃するのではなく，自分自身（自我）を攻撃するのである。良心とは，自我を攻撃する（＝咎める）超自我の別名にほかならない。

フロイトは，子供の超自我は，両親というより，両親の超自我を模範として築き上げられるといっている。その結果，超自我は同一の内容で充たされ，伝統の担い手になる。いいかえれば，世代から世代へと受け継がれてきた一切の不変的な価値の担い手になる。《人類は決して現在にばかり生きてはいないのです。超自我のイデオロギーの中には過去が，種族および民族の伝統が生き続

けているのです。この伝統は現代の影響や新しい変化にはただ緩慢にしか譲歩しないのであり，伝統が超自我を通じて働き続けて行くかぎり，それは人間生活において経済関係に左右されない強力な役割を演じるのです》（『精神分析入門（続）』『フロイト著作集』1，441-2ページ）。たとえば，「汝殺すなかれ」という禁令がそれに相当している。たとえ法がそれを許したとしても，われわれの良心がそれを許さない（良心が咎める）のはこのためである。

さらに，フロイトは，共同体も一種の超自我（良心）を形成し，文化発展はこの超自我の影響下に行われることも可能であると述べている。《ある文化時期が持っている超自我は，…偉大な指導的人物——並外れた精神力を持った人間とか，人間のさまざまな努力目標のどれか一つをもっとも強くかつ純粋に，したがってまたしばしばもっとも一面的に体現しているような人物——が残した印象がその基礎になっている》（「文化への不満」『フロイト著作集』3，493ページ）。

キリスト教圏において，人間の努力目標の一つをもっとも強くかつ純粋に体現している人物は，いうまでもなく，イエス・キリストである。そして，その努力目標とは，「汝の隣人を汝自身のように愛せ」である[16]。

フロイトはいっている。

> 文化の超自我も，それなりの理想を立て，それなりの要求を出してくる。そしてそれらの要求のうち，人間相互の関係にかかわるものを纏めたものが倫理である。……われわれがすでに知っているように，ここでの問題は，文化にとって最大の障害である人類に生まれつきの相互攻撃欲動をいかにして除去するかであり，まさにそれゆえにこそ，文化の超自我が出す命令

---

[16] 《…ひとりの律法学者があらわれて，イエスを試そうとして言った，「先生，何をすれば永遠の命がいただけるでしょうか。」イエスは言われた，「律法（聖書）に何とかいてあるか。解釈はいかに。」学者が答えた，「“心のかぎり，精神のかぎり，力のかぎり，”思いのかぎり，“あなたの神なる主を愛せよ。”また“隣の人を自分のように愛せよ”です。」彼に言われた，「その答えは正しい。“それを実行しなさい。そうすれば永遠に生きられる。”」》（「ルカ福音書」第十章『福音書』，215ページ，傍点筆者）

の中では一番新しいものと思われる「お前の隣人をお前自身のように愛せ」という，あの命令がとくにわれわれの興味を惹くのである。……「お前の隣人をお前自身のように愛せ」という命令は，人間の攻撃欲動にたいする最大の抑止策であり，同時に，文化の超自我が人間心理についていかに無理解であるかの見事な例である。(「文化への不満」『フロイト著作集』3，494ページ)

確かに，フロイトがいうように，この命令は，「隣人」を限定的な意味に取るのでなければ，実行不可能である[17]。ただし，この命令をつぎのように理解すれば，それは実行可能であるばかりか，われわれの理性がわれわれ自身に課す義務そのものである。すなわち，「汝の隣人（の自由）を汝自身（の自由）を愛するように愛せ」[18]。

自分自身の自由を愛し，同様に他人の自由を愛すること――これが，「永遠平和」を実現するための普遍的な道徳法則である[19]。

結び

『クリスマス・キャロル』の最終章は，肯定を表す《YES！》で始まってい

---

[17]「隣人」はもともと限定的な意味で使われ，同じ神を信仰するユダヤ教徒を指していたが（「隣人愛」はイエス以前のユダヤ教の常識であった），イエスがその限定を取り払ったのである（「ルカ福音書」第十章参照）。イエスに従えば，異教徒＝隣人でなければならない。

[18]「汝の隣人の自由を愛す」とは，たんに他人の自由を毀損しないということにとどまらず，他人の自由を保障するよう努力することでなければならない。たとえば，貧困状態にあるものは，なんら自由ではないからである。また，「汝自身の自由を愛す」ことも義務でなければならない。なぜなら，自分自身の自由を愛していなければ，他人の自由を愛すこともできないからである。

[19] この意味で，「汝の敵（の自由）を愛せ」も実行可能である。たとえば，われわれは自分の子供が危害を加えられたからといって，その相手に報復することはできない。このような報復が許されないのは国家間であろうと同じである。われわれは各人（各国）の自由を唯一保障することができる国家法（国際法）による秩序を求めるべきである。

る。これは『カラマーゾフの兄弟』の最後の場面で少年たちが叫ぶ《「カラマーゾフ万歳！」》に対応している。《YES》とは，生の肯定にほかならない。有限な自分の生を意味あるものとして肯定するか，無意味なものとして否定するか。これは，理論（認識）の問題というより，むしろ実践（倫理）の問題だが，スクルージは自分の生に対して《YES》という答えをだすのである。

自分の生に対して《YES》という答えをだしたスクルージは，ティム坊やの第二の父親になることによって，ティム坊やを生き延びさせ，彼が自分自身の幸福を追求する自由を保障した。それは，ひとつの小さな善行にすぎないかもしれない。しかし，その善行の種は芽をふいて，スクルージの死後，《三十倍，六十倍，百倍の実を結ぶ》かもしれないのである[20]。

われわれは，自分の生がいかなるものであっても，それが後世にたくされうると考えることによって，有限な自分の生を意味あるものとして考えることができる。そのとき，われわれは，自分が残していくものたちが，自分の生（その死も含めたすべて）から学び，それを礎として，その先に進むこと（より自由で幸福であること）を願わずにはおかない。

引用文献

ディケンズ『クリスマス・キャロル』（『クリスマス・ブックス』所収），小池滋訳，ちくま文庫，1991年。

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（全四巻），米川正夫訳，岩波文庫，1957年。

『福音書』，塚本虎二訳，岩波文庫，1963年。

浅田彰『逃走論』，ちくま文庫，1986年。

バフチン，ミハイル『ドストエフスキーの詩学』，望月哲男・鈴木淳一訳，ちくま学芸文庫，1995年。

カント『啓蒙とは何か』，篠田英雄訳，岩波文庫，1974年。

---

[20]《種まく人は神の御言葉をまく。……良い地にまかれたものとはこれである，それは御言葉を聞いて受け入れ，三十倍，六十倍，百倍の実を結ぶ人たちである》（「マルコ福音書」第四章『福音書』，18ページ）。私の考えでは，「神の御言葉」とは普遍的な道徳法則，すなわち「隣人愛」である。

カント『永遠平和のために』，宇都宮芳明訳，岩波文庫，1985年。
『フロイト著作集』1・3，人文書院，1971，1969年。
『ヒトはなぜ戦争するのか――アインシュタインとフロイトの往復書簡』，浅見昇吾編訳，花風社，2000年。